



# 伊丹潤の建築思想および建築作品に関する建築意匠論研究

後藤, 沙羅

---

(Degree)

博士 (工学)

(Date of Degree)

2023-03-25

(Date of Publication)

2025-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8637号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482385>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式 3)

## 論文内容の要旨

氏 名 \_\_\_\_\_ 後藤 沙羅 \_\_\_\_\_

専 攻 \_\_\_\_\_ 建 築 学 \_\_\_\_\_

論文題目 (外国語の場合は, その和訳を併記すること。)

伊丹潤の建築思想および建築作品に関する建築意匠論研究

---

---

---

---

---

---

指導教員 \_\_\_\_\_ 末包 伸吾 \_\_\_\_\_

(注) 2, 000 字~4, 000 字でまとめること。

## 1. 研究の背景と位置付け

世界の標準化をもたらした近年のめまぐるしい科学技術・情報技術の発達は、一定の厚みを持って存在していた地域や時間の境界といった固有性を喪失させ、実空間に対する我々の実感すらも希薄化させた。そうした動向への反動として目を向けられた地域性という概念もまた、単一の地域の文化や風土のみから生まれ出るものを指し、文化が独立的に存在するのではなく、文化が多層に重なり融合し変容していくこの現代においては、そうした限定的な地域性や時代性という概念におさまらない建築の本来性を検討すべきであろう。以上のような背景をもとにして、本研究では在日韓国人の建築家伊丹潤（1937-2011）の建築思想および建築作品に着目する。

伊丹潤は、日本と韓国という2つの文化の狭間に身を置きながら、自己のアイデンティティや韓国での体験、芸術の動向などから影響を受けることにより、多岐に渡る言説および日韓での建築作品を展開し、2005年にフランスでシュバリエ勲章、2006年に韓国で金寿根文化賞、2010年に村野藤吾賞という重要な賞を受賞した在日韓国人の建築家である。2003年のフランス国立ギメ東洋美術館での展覧会において、彼の建築思想および建築作品は“美の本質を理解する”という人間の本質的な次元において高く評価され、逝去後は韓国において2014年に回顧展の開催、2019年に映画の上映、2022年に記念館の開館を通じて、再評価されつつある建築家である。

一方で、日本においては、在日韓国人であるという特殊な民族的、社会的条件も相まって、彼に関する学術研究はほとんどなされてこなかった。韓国での学術研究は、すでに定義づけられた建築思潮に彼を位置付けようとするものであり、彼の独自性が適切に評価されていない。

以上の背景により、伊丹の建築思想および建築作品を今日において再検討する意義があるといえる。また、彼について未だ学術的に適切な評価がなされていない現状から、本研究は、彼の建築思想および建築作品の特質を総合的な視点から評価する基礎的研究として位置付けられる。

## 2. 研究の問いと目的

本研究における問いは、彼の建築思想がいかなる形成過程および特質を持っていたのか、そうした建築思想が建築作品としていかに昇華されてきたのか、さらに、そうした建築思想および建築作品は地域性や時代性を勘案しつつも建築の本来性を目指したものとしていかに再評価すべきかの3点である。これらの問いを究明するため、本研究では伊丹潤の建築思想および建築作品の特質の分析を通し、彼が生涯に渡って思考したものの全体像を把握することにより、彼が追い求めた建築の本来性について読み解き、今後の研究の手がかりを得ることを目的とする。

## 3. 研究の対象

本研究が対象とするのは、日本の建築界の転換期において、時代の流れに左右されることなく、独自の思想を貫いた建築家伊丹潤の建築思想および建築作品である。伊丹は、1937年に東京都に生まれ、武蔵野工業大学（現・東京都市大学）を卒業後、1968年に事務所を設立している。

初期は住宅作品を発表しながら韓国への踏査をもとにした李朝の建築や工芸品に関する著書を残し、晩年では韓国での作品を多く手がけた。また芸術の動向「もの派」の思想から影響を受け、また李朝の美に関する議論に関わりながらその思想を建築へと紡ぐことで、日韓を止揚する“インターナショナルなオリジナリティ”の構築を目指し、国内外で賞を受賞している。

#### 4. 研究の方法

近年の建築論に関する既往研究の調査を通じて研究の方法について検討した結果、本研究は研究の位置付けおよび伊丹が多岐にわたる言説を残したことから、現在検索および入手可能な彼の全言説を対象に分析を行うこととし、その方法は、建築家の言説を対象に網羅的に分析を行う研究の中でも、本研究と同様に一人の建築家を対象として形成過程や影響関係を含んだ特質を導くことを目的としている末包の研究の方法に準じる。具体的には、現在検索および入手可能な全言説を収集、重要言説の導出と構造化を行い、彼の建築思想を構成している要素を鍵語として抽出する。抽出された鍵語に対して、KJ法に準じた階層化を行うことにより、彼の建築思想の概念構成を総体的かつ相対的に導出し、各鍵語の定義および相関関係について分析および考察を行い、その結果をもとにして設定した分析項目により作品の分析および考察を行うことで、彼の建築思想および建築作品の特質を析出する。

#### 5. 研究の構成と概要

本論文は、研究の概要を明らかにする序章、伊丹潤像を把握する第1章、文献資料の概要と建築思想の鍵語とその構成を析出する第2章、建築思想の分析および考察を行う第3・4・5章、建築作品の事例的分析を行う第6章、論文全体を取りまとめる結章の計8章からなる。

序章では、研究の背景と位置付け、問いと目的、対象、方法、構成と概要を述べ、研究の枠組みと意義を提示する。第1章の「伊丹潤とその周辺に関する一般的考察」では、第2章以降で展開される考察の枠組みを提示するため、彼の経歴および周辺の人物や芸術運動を含む概要を整理し、既往研究および評論文を確認することで、伊丹潤像を把握する。第2章の「伊丹潤の文献資料の概要と言説にみる建築思想の概念構成に関する考察」では、彼が生涯にわたって著した多岐にわたる論考のうち、現在検索および入手可能な全言説を精読し、そこから選定された重要言説より鍵語を抽出し、得られた鍵語をKJ法に準じて第1水準から第4水準までに階層化することにより、主要概念として【李朝】、【韓】、【現代日本】を持つ彼の建築思想の概念構成を析出する。第3章の「伊丹潤の【李朝】の思想に関する考察」では、彼が自らの建築思想の最も根底に据えた【李朝】についての思想に関して、《もの》、《人間の精神》についてそれぞれ分析および考察を行い、その経年的移行を導出する。第4章の「伊丹潤の【韓】の思想に関する考察」では、彼が生前に赴き実際に肌で触れた【韓】についての思想に関して、《自然》、《人間の精神》、《集落》、《建築》についてそれぞれ分析および考察を行い、その経年的移行を導出する。

第5章の「伊丹潤の【現代日本】の思想に関する考察」では、彼が活動の拠点として日常的に思考した【現代日本】についての思想に関して、《自然》、《人間の精神》、《都市》、《建築》についてそれぞれ分析および考察を行い、その経年的移行を導出することで、言説にみる彼の建築思想の特質についてその時期区分を含めて析出する。第6章の「伊丹潤の建築作品に関する事例的分析」では、彼の各年代を代表し、かつ意匠的に特徴のある作品として選定した8作品について、前章までの考察により得られた結果をもとに選定した分析項目である、設計対象および設計理念をもとに事例的分析および考察を加えることにより、彼の建築作品の特質を析出する。

以上で得られた知見をもとにして、以下のような研究の成果を得た。

## 6. 研究の成果

本研究では、伊丹の【李朝】、【韓】、【現代日本】に関する建築思想の分析を通じて、彼が[近代化]に対する批判、[芸術]の動向、[アイデンティティ]を思想の背景として、《建築》を媒介とした普遍的な〈美〉の[知覚]の実現に《建築》の本来性を見出すことを目指したこと、そして、彼は【李朝】、【韓】、【現代日本】の相互参照による時代や地域の厚みの思索の中で、〈美〉の次元において固有性を遵守しながらもそこに内在する普遍性を現代の文脈へ提示すべきであることを感得し、そうした思想を《建築》の制作を通して昇華しようとしたことを導出した。さらに、そのために彼は〈変化の受容〉、〈過去の尊重〉、〈時代の超越〉としての[時]、〈意識の中性化〉、〈精神との呼応〉、〈手の痕跡〉としての[生]、〈文脈の継承〉、〈敷地からの想起〉、〈貌の獲得〉としての[地]という3つの設計理念を抱いていたことを導出し、また彼の建築作品の分析より、[素材]、[色]、[自然環境]への様々な操作を通してそれらの設計理念の実現が目指されたことを析出した。その上で、彼の建築思想および建築作品の現代的意義として、《自然》、《人間の精神》、《都市》、《建築》の関係、固有性と普遍性を超越した《建築》の本来性、[時]、[生]、[地]の存在について考察した。

以上により、文化的多重性を持つ彼は、葛藤を抱えながら自己を模索する中で、“日本らしさ”や“韓国らしさ”や“インターナショナル”といったものに依存することなく、自らの追求する〈美〉の次元において《建築》の本来性を追い求めたということを析出し、そうした過程を通じて形成された彼の建築思想および建築作品は、従来の地域性という概念におさまらず、過去、現在、未来にわたって持続的に受け入れられるものとして評価することができるとの結論を得た。